

## 移住民受容に関する研究ノート

——とくに十九世紀英国を中心にしたハンド・オブ・トレレイション——

山口 信 治

### 一

われわれは先きに（仏教大学社会学部論叢第十三号）にて、東部ロンドンに開花した博愛主義フィランソロピストらの貧民救済事業、とりわけ「大学セツルメント」の創始者C. バーネットについて述べた。その際、僅かであるが大学人の貧民にかし与えたヘルピング・ハンド（helping hands）についても述べたが、今回は多少話題を変えて何故そんなに多勢の貧困者を首都ロンドンの周辺にかかえねばならなかったか、そのフィジカルな面に焦点を合わせてある事柄を述べてみたい。

即ちある事柄とは英国に移り住んだ移民団を抜きにしてはそれを語る事が出来ないと思え考えたからだ。しかもその役を担った唯一の場所が（東部ロンドン）イースト・ロンドンなのである。ここで扱うテーマはそれを受け入れるサムシング即ち土壌がこの東部ロンドンに存在していたと解していいからだ。従ってまた、東部ロンドンの特質

を知るもつとも良い手がかりは実はこれらの種々維多の民族をあらゆる時代を通じて受け入れてきたということにある。しかも前にふれたように「大学セツルメント運動」もこの移民団のもつ社会問題とも無関係ではいられなかった。むしろこの運動をより一層うき彫りにしたと言っても決して過言ではあるまい。

総じて各時代の流れもの（移民団）の大半は、首都ロンドンの寄生的存在（厄介者）であつた。ただ僅かにフランスより宗教的迫害によつて渡英してきた新教徒ユグノーを除けば、ただホスピタリティズ（hospitalities）にすがつて生きた人々の歴史がこのイース、ロンドンにはある。

そこで、今回の報告はつとめてこれらの移民団に焦点をしばらく、そこから屈折する様々なスペクトルを理解しようとするのがこのねらいである。ただことわっておきたいのはテーマはあくまでも移住者（immigrants）俗に彼らを「インベーダー」（invader）と呼んで

いるがのそれであつて決して侵略者のそれを意味するものではないことをことわっておきたい。

## 二

十八世紀以降、イースト・ロンドンの様相を語る場合茲に集散離合した人々の大半が未熟練な労働(務)者たちであつた。もとよりその大半は国内よりさらには国外よりの「インペイダー」たち、つまり流れものも決して少なくなかつた。今仮りに彼らを「流れもの」と呼ぶならばこの東部ロンドンの歴史はまさにこれらの「流れもの」の歴史と言つても少しもおかしくない。

少し見方を変えれば彼らを受け入れる側に何らかの移住民に対する「許容の手」(hands of toleration)ともそれを飲み込んでしまう何ものが存在したとみるべきであらう。

さしずめ、この「許容の手」なる“hands of toleration”こそ英国の歴史著述家、W・ビザントをして言わしめれば、「寛容」なり「許容」と訳出できると思うが、宗教的ニコアンスをもつそれに近いということを指摘しておこう。

では、いつ頃から誰(どんな民族)がどこに流れ込んできたかこれを次ぎに述べることにする。

その前に若干の頁をさいて「流れもの」について説明しておきたいことがある。本論においては時代的限定を英国の産業革命期前後に求めるが、ここで主題にする移住民に対する寛容を知らうとする場合必

ずしもこれに限らなくとも、つまりこれ以前にもそうした寛容さを示してきた歴史的事実がある。ただ今回は「大学セツルメント」(トインビー・ホール)との関連でその運動を位置づけようとするためである。

時代をさか登つて前史時代(period of pre-historia)つまり石器時代を終えさらに銅や鉄の時代も過ぎ、A・D・四三三頃ロンドンはその帝国ローマの侵略を受けていた。以来十世紀に亘つて統治されたが、このローマによつて指導された都市ロンヂュームが今日のロンドンの呼称になるのだが、ローマ滅亡後サクソンやヴァイキング等々の侵略を度々受けることになった。ところがこの侵略者とロンドナー達との間にはさしてトラブルなどなく、かつてローマ軍の侵略にとつて先住のネティブ達のとつた態度(寛容さ)は次におし寄せて来た外敵にも言えた。むしろその態度は寛容さ(“hands of toleration”)を以つてことを処理しているところに驚きを隠し切れぬものがある。

ローマ軍の退去の後、サクソンをはじめヴァイキング、ユーテ(Jute)、アングレ(angle)それにデンマーク人、ノルマン人、フランダーズ人、フランスにドイツ人等々英国の都市さしずめロンドンに流れ込んできた。さらにはまたこれらのヨーロッパ諸国はもとよりコモンウェルズの人々までも寛容さをもつて彼らの生活を保障してきた、食事や衣料品はもとより、家を与え、その上仕事まで用意するといったホスピタリティズ(hospitalities)をいかになく發揮したことにはただだ感服するのみである。しかもここに流れついた者たちはみな英国にメリットに、つまり観光客のように外貨をもたらした

ものでは決していない。むしろ無一物に近い「着のみ着のまま」というフレイズがあるがまさにそうした状態で流れつき一宿一飯を求めてきた者たちも少なくなかったし、しかもその数つまり移住民の数だが決して少なくはなかった。ゆえにこの急増する「流れもの」に対しても寛容さは確かに市民の負担を増し、様々な民族問題(racism)、民族間の差別(racial discrimination)同種族間の葛藤(racial problems)を伴いながらも、この移住民への対策の(制度)なかに寛容さが伝統として生きづいていることは驚き以外の何物でもない。従つてまた十九世紀の「大学セツルメント」の起りとその役割とをクローズアップしかつその真理を追求する場合でもこの市民の伝統即ち“hands of toleration”を抜きにしては何一つ語れないと考えた次第である。

もっとも寛容の態度とはいへ彼らをシティ内に移住させたのではない。むしろそれに隣接する辺境の地(ローマが作った城壁の外側カタコンベ＝墓地)に彼らを受け入れることになる。さしずめ沼地の多いステップニー・バラ(地区)に白羽の矢が立てられた。

今、その古文書に書き記されてあるいくつかの記録とW・ビザントらの著述を介してその寛容さのあらましに接近してみようと思う。

それらを見るかぎりこの教区での負担には想像を絶するものがある。ただこれを緩和し緩衝させたものは十八世紀以来テムズのリバー・サイドに開発された工業化と無縁ではなかった。さしずめこのドック開発に伴う地域開発がこれらの未熟練労働者たちを寛容にした条件の一つとなつた事は間違ひあるまい。

他方、ここに流れついた「流れもの」即ちインベイダーたちは特殊な事情による国内はもとより国外からの脱出者たちと言える。たとえば宗教的、政治的いわゆる人為的なそれと、いわゆる自然的条件即ち天災地変等々による不作・不況により土地や家を捨てて都会に流れ込んできた者、前者は自国の宗教的・政治的迫害から自由を求めて逃れてきた者(逃亡者)たち、あるいは一時(テンポラリー)的避難してきた避難民であり、後者は天災や飢饉から逃がれてきた者で、自由よりも餓えを満たすため移動してきた者たちだ。

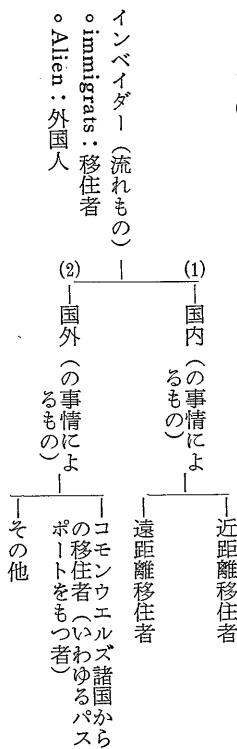
従つて、その寛容さの度合もそうした事情と切り離しては考えられぬが、度々の招かざる移住民に対して救貧法(Poor Law)(一六〇一年に制定されたエリザベス法)と救貧委員(Guardian)の地域組織化とその運動に十二分に發揮され、強いては社会事業(social work)の実践的理論をつくり上げる結果に作用したことは論を俟つまでもないところだ。

即ち市民の寛容さもこうした二つの物理的条件のなかで拮抗しながら十分に發揮出来得たと解すべきであろう。

さらに、われわれは都市さしずめイースト・ロンドンに流れ込んでくる二つの流れについてデイスカスしておこう。その一つを国内、国外と大別にすることが可能であろう。確かに外国人を招える場合と自国のもものでは寛容さの程度もその内容も違はずである。言つてみれば他者に対しては冷やかであり、身内には何程か同情的なのは人の常のようである。

もち論、先に述べた如くいかなる理由でここに流れついたかでもこれは左右する。だがここでは一応前者の国内からの流入者、さらには国外者と分けて説明をしておく。(図(1)参照) また後者の国外者をも二つに、つまり英国のコモンウェルズ諸国からの移住者、言ってみれば入国のライセンスをもつ者とそれをも持たぬとに分けてそれにアプローチする事も可能だし、さらにその下部をも分けることも可能になる。ただ茲では英国の寛容や (hands of toleration) の関点からするとそれが複雑に交叉していることは事実である。

図 (1)



たとえば同じ国内事情でも一つのことば、つまり共通の言語を共有するか否かによってもそれは異なる。具体的な例だが数十マイル隔ったエセックスの農民とスコットランドやアイルランドそれにウエルズのそれとは違う。むしろこの言語という点では(2)の国外者であっても同一言語つまり英語を話すことができればインド人も西アフリカ諸国からの移住者の方が寛容さにおいては後者の方により大となる傾向もつ。むしろこの仕末におえない「厄介もの」として敬遠したり、かつまたネグレクトされたりする場合も決して少なくはない、とくに難

色を示したのは彼らが英語を知らず決して英語を話さなか(英語をつかおうとはしない) ったからだろう。この意味で完全に外国人 (Alien) 異邦人なのだ。従ってその寛容にも異質なものが異邦人としての扱いをうける。

(2)のその他には天災やそれに伴う災害つまり食糧の飢饉等々による移住者で、オランダ、ドイツなどの農村から流れ込んできた者たちがいた。彼らの多くは一時的寄留者で単身もしくは数人で英国にいる縁故者を頼ってやって来た若者たちで、今日でいう出稼ぎ労働者がこれに当たる。従ってまたほとんどの者は嫁いだら自分の国に帰る連中だ。社会的にはテンポラリーを特徴とするカテゴリーに類できるもので、従って純粹に外国人 (foreigner) つまり (alien) に属するといっている。

ところで次に述べようとする連中は、凡そ前のカテゴリーには属さない、いわゆるイミグレーション (immigration) たちだ。ただ歴史上きわめて重要と思われるものについては時代的限定をはずして書き留めておきたいものがある。

## 二ノ一

まずその一つ、しかももともと時代的に早い移民は、フレンチ・ユグノ (French Huguenots) であろう。彼らはフランスにおける新教徒に対する宗教的迫害から新教国英国に自由と保護を求めて渡って来たキリスト教の信者たちだ。当時英国はヘンリー八世の治世でローマに反旗をひるがえし謀反を起したいいわゆるリホーメシイション

(Period of Reformation) 時代であった。従つてこの新教・英国  
々教会 (Conformity Church) に保護を求めてのそれで、これに對  
する英国はもとより市民一般の示したポスピタリティズは国のめんつ  
に關わるもので、いわゆる国家的、政治的課題となつた。

くわしい事は避けるが法令 (Edict of Nons) を王が取り消した  
ことに始まる。

その移民の数はピークには年間一万五千人余にものぼつたという。  
練勢についてははつきりした記録がないので分らぬが相当数であつた  
ことは事実だ。早速、彼らを救済するドウネイションが集められた。  
このステツプニー・バラの古い文書によると六万四千ポンドという大  
金が準備された。

はじめシティを中心にロンドン周辺にコロニーをつくつて住んでい  
たがその数は一万三千五百人余といひ伝えられているが、注目すべき  
ことはその大部分がイースト・ロンドンのステツプニー・バラの北  
部に位置するスピタルフィールド (spitalfields) に移り住んだ。当時  
ここは畑地を利用して果実等を栽培していた所であつた。その昔、  
先住者サクソンらがここを統治していた頃旧シティの城壁を補修し、  
かつ空地の警備した。今日ここはロンドン・タワーの東側に當るが、  
マイリーズ・ミドルエセックス一帯を整地している。しかもこの跡  
地に布教の中心であるアービー (修道院) やホスピスタ (病院) など  
が建設され、とくに歴史上名を残す建築物や施設がテムズのリバーサ  
イドにつくられるがセイント・カサリンドックとセイント・カサリン

病院 (St. Katharines Hospital) がそれだ。とくにこのドック周  
辺には外国船の船乗り達が寄留していたが、なかでもアイルランドの  
貧しい船乗りたちが例のビタミンC類の不足による病い (壞血病・ビ  
タミンCの不足でおこす出血しやすい病氣) で多くの者が彼らの治療  
を受けていた。さらにミドルエセックスの北部、城壁の北東部に位置  
する重要なローマ時代のゲート (アルドゲイト) があるが、この北側  
の空地にはスピタルフィールド病院と修道院が棟を並べていた。いずれ  
もヘンリー八世のリホオメーションによってとり破された所で、この  
跡地にフレンチ・ユグノーのため簡易住宅が建てられここに定着させ  
た。

以来、ここによく適応し、自まえの生業 (シルク織り) をいかして  
フレンチ・ユグノーの社会 (コミュニティ) をつくり上げていった。承  
知のこととおもうがこのユグノーをシルク織りが英国の産業にもたらし  
た影響は実に大で、今日、これらの作品はベターナル・グリーン博物館  
(Museum of Bethnalgreen) ケンジンドンにあるビクトリア・アル  
バード博物館の姉妹館) に保存されている。時あたかも国際博覧会が  
英国しかもロンドンで開催されたが、英国産業が世界に注目されるよ  
うになったのもひとえにユグノーたちの織りあげたシルク製品 (Silk  
Weaving) であつたことは万人の認めるところとなつた。

以来、東部ロンドンの主要を基幹産業としてロンドン市民の台所を  
まかなつていた野菜づくりから、世界の織り物工業として栄えさへ町  
を一変させてしまった。単に服地の織りものに止まらず、これを裁断

し加工する工業団地へと発展させていった。当然これらの製品を流通するためのマーケットイングも発達整備されて、一時はこの種の職人や商人の数が人口の凡そ五分の三にも達したと言う。この地区最大のオープンマーケットがアルゲイトに近いミドルエックスにあるが、スロアの活躍した十六世紀からC・ディケンズの活躍する十九世紀までピチコートレーン (Petcoat Lane) の名で世界に知られる程の名店街だったところだ。その他、住宅改良をさげんで止まなかったオクタビア・ヒルの改良区スラムクリアランス (Slum clearance) となったベタナルグリーンにもオープン・マーケットが出店をだしてにぎわった。しかもここで売り買いされた品物の多くは主に衣料品であるが、当時の調査によるとロンドンの八割近くがこの地の二ヶ所のオープン・マーケットで売買されていたという。

いずれにせよ英国の産業発展史上この移住民ユグノーの名は記憶から忘れ得ぬ存在となったし。彼らの移民は英国の重荷とはならなかった。ところが次ぎに述べる移住民は貢献度からユグノーの比ではなく、むしろハンド・オブ・トレレーションの恩恵にひたり込んだ移民 (immigrants) を紹介しよう。

## 二ノ二

別名これを “unfortunate Populations” 不幸な族<sup>やから</sup>でも訳出できようが、土地を捨て命からがら逃げ出して来た人々の群がある。群といっても土地を捨てた百姓たちだ。何故不幸だったかと言えば彼らは度重なるフランスとの戦争で農場が戦場となった人々で、戦争の恐

怖と不安から脱出してきたわけではなく、農場が戦争で荒廃したためだ。彼らは他の移住民のようにテンポラリーにロンドンの都市部に職を求めて来たのではない。何もかも一切を捨てて逃げだして来た連中だ、そうした大半はロンドン近郊に親類・仲間などに頼るあてのない行き先きの知らない脱出者たちだった。

一七〇九年から三年間に凡そ一万三千余りの人々がこの難をのがれてロンドンに流れ込んできたと言われている。早速同バラではこのため二万二千ポンドの救済金が集められた。百姓より自活のみのない彼らの更生のため出来る丈けのことをしたが終りに力つき止むなく国外に移住者 (emigrate) として北アイルランドや南北のカロライナ・ニューヨークに送り込まれた。内訳をみると三千人余は北アイルランドへ、千二百人ほどは南北のカロライナ地方へ、残り四千人余りが北米ニューヨークに送られていったが、とくに “unfortunate population” はまさに次ぎに示す書録によるものであろうことは凡そ察しがつく、つまりニューヨークに向った emigrant のうち千七百人は途中海難にあい犠牲になってしまったというものだ。土地を失ない、財産をことごとく失なった彼らは新天地を夢見て大陸に渡ったものの海の藻屑と化してしまったことだ。それに北米の都市ニューヨークにいた移民団も結局そこにはおれずその足でペンシルヴァニアに送られてしまうという実に悲しい歴史がこの中には含まれているからだろう。

## 二ノ三

この三つ目のインベイダーは、凡そ九十年後の時あたかもフランス

革命の機が。フランスの僧侶たちとノーブル (noble: フランスのハイ・クラス) が逃亡してきた。他の逃亡者のように自国の事情が落ちつけばリターンする者たちだ。彼らの記録は "emigrants of 1792-1793" にくわしく残っている。今若干これを参考とすると、移住してきた当時は未だその気品(ノーブル)とプライドを保っていたが時と共にそれも薄れ、終いにはノーブルとしてのほこりを自ら捨ててしまうことになる。今日、彼らの気品を忍ぶものはシテイから五ないし六マイルなど隔ったところに小さなコロニーを作って住んでいたそれだ。たとえばセント・パンクラス (St. Pancras) 、『その教会の墓地』<sup>チャーチヤード</sup> には彼らの多くの名を残している。またその近くのハンプシード (Hampstead) という処には数十戸その家が残っている。もつとも彼らの気品の高さを今に残しているものは教会堂である。これはロマン・カトリック教会より献堂されたものだ。がノーブルらしい気品がその会堂の建物と調度品に残されている。さらにもう一つのコロニーはシテの西部に当たるウエストミンスターとシテイ内のソーホー (Soho) に比較的多く住んでいた。彼らは英政府よりゆずり受けた高級ハウスに住み、その上近隣の住人たちから手厚いポスピタリティーズをうけた。ところが事情が一変し自国にもどったノーブルたちからフランスを訪れたときなどに一つもてなしを受けなかったとそれを知る古老たちは口ぐせのように不平を言う。むしろ難をのがれ国の保護を受けたノーブルたちはその扱いに不満さえもっていたという。

一般にそうした外国からの逃亡者を受け入れる場合の英国民の態度は W・ビーザントのいうハンド・オブ、トレレションは実のところ「憐れに受けたのだから憐れに与える(施せ)」というキリスト教的精神よりも、一面彼らのもつ寛容さはキブ・アンド・テイクに見られる合理主義的な嗅いさえる。たとえば親切な行爲に對しては少なからずその親切に報いることを求めているところがある。こうした深層を司さざる心理は時代が変わり新しく外国からの移住者を受け入れる場合でも無意識にせよ頭をもたげところなどそう変っていないと見るべきであろうか。

従つてまた歴史著述家 W・ビーザントの『東部ロンドン』の一節にもそうした感情をかくし切れず出てきているところなど大面白いく所だ。(W. Peasant, East London Chap. IX. The Alien p189) この辺が寛容さの別の意味をもつ一つの側面であろうかとおもう。

## 二ノ四

その他、烈挙すべき外国人 (Alien) 、『とくに逃亡者は Poles らのそれがある。三十年に余る政権の失敗から英国に逃亡してきた政治指導者たちで、英国政府より手厚く保護されポスピタリティーズを受けた連中だ。正確な数こそないが凡そ何千何百という単位だとおもうがここに難をのがれて来ていた。政府は彼らに家と食料を与えて保護したがついに自国の裁きが解けず異国の地で果てたが、その子孫たちは英国人に同化してしまっている。

## 二ノ五

今世紀に入っても英国への流入現象 (influx) は止まない。たとえば Russian Polish と German Jew だがいずれも厄介ものの部類としてハンド・オブ・トレレーションの対象となった。この二つの移民については章を改めてケース研究の項で詳細に述べたい。ただ後者の German Jew (ドイツ系ユダヤ人) は例の Judenhetze 政策上もとても著名な移民族だ。

それにもう一つ、これは先きの Judenhetze とは関係はないが、急速に発展したドイツの工業化の後に起ったものだ。なかでもハンブルグ、ベルリン、アントワープ、ロッテルダムなどが工業化の中心地となるが、当時のドイツのユダヤ人たちは英国の首都ロンドンはまさしく「神の約束された地」 (the land of promise) であるかの如くここを招れた者が少なくなかった。詳しいことはケース研究の項で述べるが、こうした「神の約束された地」への移動は今世紀に入っても止むことがなかった。ただ「神の約束された地」が産業革命後の英国の工業化から米国のそれに乗り移っただけのことで、いずれ全ヨーロッパ諸国からここをめざして移動が始まったといつて良い。

### III

それでは話をもとに戻して、英国とくにロンドンというシテイに移り住んだ多くの外国人 (Alien) についてももう少し補足をし、また彼らの社会的適応について若干述べておきたい。ただこの頃ではあくまでも、英国社会への適、不適応についてはほんの少し述べておくにと

どめるのだが、ただ話の都合上、やや時代をさか登って今世紀の初め (一九〇〇年のはじめ) 東部ロンドンについて記録を残した作家たちの意見をまず総合してみることにする。したがって多少今日とは様子を異にしていることをこたわっておきたい。また今日の移民の問題については先程述べた如く章を改めて、ケース研究としてアイルランドとポーランドについて述べる。

### 三ノ一

この町を歩くとやたら目につくものが商店の看板や広告 (文字) にドイツ語とユダヤ語が使われていることだ。即ちドイツ系ユダヤ人が、とくにシテイに近いこのホワイトチャペルやスピタルフィールドなどに住みついているということだ。日曜日の朝などそこを散歩する者、朝市やマーケットに買い物にくる者はおお方この連中だ。ビーザントのことはよれば、「何千何百」 (数え切れぬ) という人が町を往来していたことを記録している。しかも彼をして言わしめればこのドイツ系ユダヤ人を次のように評している。すなわち “Peaceful invaders……” と。確かに彼の評価は今日でもそうたいして変りはない。ただ何故彼らを “Peaceful invaders” と呼ぶようになったかはさだかでないが、一見して彼らを見分けることは可能だ。

彼らは凡そ東部ロンドンの全域といえる程広い範囲に住みついて、その道路ぞいに店舗を構え商いをしているが、ここでの生活は決して満足すべきものではなかったようだ。ただ難民という事情もあり、外国に身を寄せ不自由な生活を強いられながら、尚かつ本国での生活よ



りも数段の格差がありながら表向きそう大して暮しが貧しいというのでもなく泰然自若とした生活をしているところからこう “Peaceful invaders” と呼ばれたのではないかと察する。しかしこの国への適応はただ、生活の良し悪しだけではなく、同時に他の要件も合せ考えてみなければなるまい。例えば教育であるが、子供達を普通のボードスクール (Board School) に通わせ一般の英国の子供と何ら遜色ないように教育しているのである。彼ら自身も歴とした英国人になりすましており、もち論彼らの名前も英国人に似せてクリスチャンネームをもらい行動の一切を同一化することに努めている。第一彼らのものの考え方など英国人と寸分変らないし、生活様式でも最低必要なものはそろえつフマスターして紳士淑女としてのマナーも身につけて英国の施設、法律、慣行なども何なく受け入れ(同化)してしまっているところなど、他の外国人移住者には見られない適応性をもっている。その上異国人の感情、つまり、悲しみや悦びなどのそれをも完全といってよい程だ。ただそれでいて彼らの次の世代、すなわち二世(Second Generation) では親つまり一世のようにはうまく同一化されているとは言えない種々の問題が出てきているし又、社会学上興味のある問題でもある。

### 三ノ二

同じバラーにおける第二の民族構成は、ポーランド系ユダヤ人 (Polish Jews) である。彼らは一ヶ所に集って生活しており、おそらく慣れぬ土地ゆえの処世術と思うが、相互扶助という堅い結束力に

よってお互いが結ばれている。従って又独特のコミュニティを作って住んでいるが、それを “quarter” (袋小路) と言うのがそれである。

### 三ノ三

ウェストエンド (西野ロンドン地区) には他のヨーロッパ系の人種、イタリア人、ドイツ人、フランス人、それにスイス人等が入り混って住んでいる。そのうち、ドイツ人を除く彼らはレストランのウェイターやコック、その他ランドリー、カルフテリーズ (charcuteries) 食堂などに働いていたが、これは職場が彼ら外国人を好んで雇っていたからだ。ロンドンには何千人ものドイツ人が事務員としていた。

ある者は初めからそこにとどまるため、ある者は勉学に來た者たちで、特に後者の勉学に來た連中は英国の産業の発展と経営学などを勉学する目的をもっていた。その中にはそうした優秀な経営法やマーケティング情報 (価格、品質) を自国 (Hunburg, Altora) の仲間たちに送ったのである。こうしたドイツ人達は出来るだけ早く英国を学ぼうとするため適応が早かったと言える。

### 三ノ四

次にフランス人のコロニーについても述べよう。まずどこに住んでいるかと言うことだが、凡そ何千という単位のフランス人がコロニーを作っていたことは事実だ、その代表的なものは先にみた東部ロンドンのユグノーのソサイティがそれだ。彼らはそこにフランス病院 (France hospital) と二三の教会 (Franch Protestant church) を作って住み、いわゆるコミュニティを形成していた。ところが他の民

族と違うところはに東部ロンドンのあちこちに袋小路を作つて住むのではなく、ただ英国人に異様な感じを与えるのは、ここでは通常フランス語が使われていたことだろう。

### 三ノ五

その他、ここには善良な多くのオランダ人達も住んでいた。その大部分はスピタルフィールドにコロニーを作つて住み、主にタバコの製造に従事していた。その他はあちこちに散在していたが日曜日の朝毎には、教会に集まっていた。今日でもその一つオーガスチヌス(Augustines Feirs) 教会が残っているが、当時ここでは自国のオランダ語で礼拝説教がなされていた処である。ビーザンドの記録のなかにも度々出てくるが、彼はその教会に座つて分けの分からぬオランダ語に耳を傾けていたようだ。そして時折り彼らの顔色をうかがいその真面目な面持ちを次の様に感動して書き記している。「彼らのどの顔を見ても真険だし信心深い様子で説教者のことばに耳を傾けている」とまた、「彼らの言葉の調べはあたかも母国語(英語)を聞いているかのように耳に良いひびきをもつて伝つてきた」とさえ述べている。今はその多くがこの教会(Augustines)の墓地にそのともがらを休めているが、時代がかわり今日ではこの祖先たちの霊前で新しい子孫たちが礼拝を献げている。彼らの態度にはただならぬ畏怖の念がただよっているが、これは先代の開拓者らにとつてこの地、即ち教会の所在地は「聖なる地」であつたからだろう。これは清めの火によつて特別な

聖別された者のみが通過のできる、つまり天国のパスポートを意味した聖なる契約の場所でもあつた。

バーネット戦争(Barnett War)とバラ戦争の後始末に戦場に散らばつていたナイトやロード達の遺体をこの教会の墓地に埋葬された程であるからして英国人といえ、この教会の門をくぐらねば天国には行けぬと信じられていた聖なる場所であつたことがこれでわかる。

### 三ノ六

その他、東ロンドンに住んでいた者のなかにはスエーデン人がいた。ビーザンドの調査の結果でもあちらこちらに点在していたことが分かるがその数はそう多くはなかったようだ。同バラ内では唯一ヶ所だけ、セント・ジョージ・イン・ザ・イースト(ST, Georges in the East)のすぐ近くにある教会で彼らに出会っている。その教会はスエーデン様式をとり入れた礼拝で日曜日毎にサービスが施されていたが、ビーザントの目にはうるわしい民族「a pleasant-looking race」として映つた。続いて彼は次のように彼らの容姿について記している。「ブラウンのかみの毛、青い目をしており、その上いかにも船乗りらしいたくましい筋目を持った男たちだと、又すぐにも彼らと話してたくなるような、そんな連中だ」と。

### 三ノ七

以上この地への外国人について移民団(immigrants)について述べたが、特に忘れてはならないのは「新しくたどりついたユダヤ人」(Newling arrived Jewish Immigrants)のそれだ。彼らは一様

に貧しく、しかもその大半は極貧の群だと言ってもいい。彼らは何一つここに持つて来られなかったことを物語っている。彼らに対してこの地区の先住のユダヤ人(Jewish Board and Guardians)から成る組織の救済委員らによって救済策が講じられた。まず衣食はもとより彼らの自活のために適当な仕事があてがわれ、その上、最低生活に必要な金額をも支払われた、とくに新参者には仕事にありつき生業につくまでの当分の間救済金がつづけられたり、ある者にとっては適当な技術をマスターする期間を含めてその家族を養う一切の金が支払われた。

我々が驚ろくのはこれらの新参者にかくまで救済の手をのべた先住のユダヤ人らの組織、つまり“The Jewish Board and Guardians”である。少なからず社会事業を志す我々プロパーにとつてはその組織なり運用に大変興味をもつところだ。詳細な説明はまた別の機会に論じてみたい。ただここではそのユダヤ人救済委員組織が “Well-Mangel board” であったことを書きとめておく丈けにする。少くとも社会事業 (Social Work) を新参者 (ニューカマー) への社会的適応を考えてまず人々の心に自主独立を促し、それと同時にあらゆる仕事を与えて訓練の機会を与え、他方英国当局より仕事を紹介してもらつてあくまでも、テンポラリーでなく、英国人労働者の生活水準までに保障したことは価値ある偉業として認めてもいい。

若干まとめれば凡そ次のようになると思うが、その第一は敏速な処置でありかつ教育や訓練、仕事のあつ旋などを組織的に取り組んだところだ。この組織こそ組織化 (コミュニティ・オルガニゼーション) と

いつていい。そればかりか民族の特徴をも度外視してはなるまい。例えばフランス、ロシア、ドイツなどのヨーロッパ大陸からやってきた “Judenhetze” などとは異つた扱い方をされたと言つていいであらう。

どこまでこれらこの新参者 (Newly arrived Jewish Immigrants) についてこの地での幾つの特徴をかいつまんで書きとめておこう。その一つは、まず彼らが独自のコロニーを作つて住んだことだ。しかも毎年その共同体の数を増やし終りには東部ロンドンのあちらこちらにユダヤ人コロニーを作つたことだ。その最も大きなコロニーは大学セツルメント (トインビー・ホール) に置かれたホワイトヤチペル通りの北側にある。もち論旧シテイには属さず、つまりシテイの外側 (アルトゲート) から東にのびたホワイトヤチペル通りとさらに北に向うスピタルフィールドこれらを結ぶ三角内にユダヤ人街を作つて住みついた。したがつてわずかにシテイから半マイルと一マイルしかへだたつておらず、むしろ都市に隣接した所にコロニーを作つて住んだところにまず人間生態学上の特筆がある。即ち比較的、川ぞいにはアイルランド人、スエーデン人 (船乗り) が住みそれより内部にはフランス人 (ユグノー) やユダヤ人等が住み、いずれも主たる職業による生體的な分布を特徴としていた。

ときにわれわれは一般に「ユダヤ人」と聞けば急ぐ思い出すのが『ベニスの商人』であり、かつその彼らの悪くどい商法であらう。所変つてこの貧民街のプアーシュ (poor Jews) たちもまた同じ様な

ことが言えるのは実に奇妙な感じさえするものだ。今思い出すままに二・三紹介すると、まず飲料水だ、これが沼地のステップニーには是非無くてはならぬものの一つだったが、これに目をつけた彼らは農民たちに高く売りつけるといふものだ。水を高価で売っておいてあげくの果百姓から農作物をだまし取るといふ悪らつぶり。百姓たちはこのしふんだり蹴つたりの悪徳ユダヤ人たちを「うじ虫ども」と呼んで敬遠た。それでも水はほしさのあまりの悪循環に苦しめられた。

そうして小銭をためるかは部屋代を不当につり上げるかして貧民から金をまきあげて、「あぶく銭」とは良く言ったものでこうしてせしめた銭はみな好きなギャンブル(闘犬、闘鶏やねずみとりなど)使い果たしてしまふ。

当時こうした悪徳商人ならぬ行商どもが東ロンドンを寝城に数千人も住んで横行していたといふのであるから想像に余りがあるとおもう。

彼らと呼ぶもう一つの呼び名がある、それは「はいえなユダヤ人」である、はいえなどはアフリカのサバンナに住む動物(掃除人)たちである。これは当時、貧しい移住民を救済するため救貧委員からの活動が注目されていたが、彼らの提供するサービスには何んでも手をだすところから由来したものとされる。例えば貧民たちに斡旋される仕がりそれを横どりしてしまつて後から遅れていった者たちは仕事事に群にありつけないということがしばしばおこる。言つてみれば生活欲旺盛といふのか悪がしこいのかは分らぬが銭金になれば何にでも手を出

してするという国民性をもっている。かといつて銭金だけではなくこれを度外視して働くものもある。その中には実に「堅実なユダヤ人」と呼ばれる連中もいて法を守り、従順にそれに従い成功を治めた者も少なくはなかった。

ところでこの成功の秘訣だが当時の評論家たちが湧かせた議論のひとつである。或る者は、悪がしこさといひ、自然に備つた民族の知恵といひたり様々だった。なかでも、ユダヤ人の研究者C・ブーツ(Charles Booth)なづは「プアーヂュー」(Poor Jews)たちのかしこさを次のように評している。「この貧しいユダヤ人のなかにも宗教(ユダヤ教)を通じて得たよく熟練された知恵というものが残されている」と、これは言つてみればこの社会つまり新しい英国での適応性生き残りを示したもので、この「よく熟練された知恵」があれば十二分に生き残る(生活)してゆけることを言つたものだと思察する。また度々引用するW・ビーザントによれば端的に「彼らの成功、不成功はただにその知的優秀さにある」とまで断言した。とくにビーザントの場合単に著述家であるばかりか、彼の唯一のものを書くこの法はよく彼らを観察して書くといふそれを持ち合わせているといふのであれば尚更のことである。率直にこの優秀さを認めねばなるまい。ところがその後でこうも言うのだ「よく観察してみるとさりとて彼らの内に特別秀いでた者ばかりではない、例えば法律家にしても然り、僅かに二・三人出てるか出ないかである」と、さらに「数学や科学の分野にしても然り、二・三人の著名な学者を出している程度で」これ

を以つて国民性の優秀性を云々するのはおこがましいとまで主張した。かつむしろビーザントの目に止まったのはその知的努力とその技とにユダヤ人独特のもつ」と結論づけたのである。

従つてわれわれはこれらの指摘をふまえてもう一度ユダヤ人の東ロンドンの歴史を再考すべきであらうかと思う。むしろこのスリットを通してみたスペクトルこそ彼らの社会適応を知る手がかりとなるのではと考えた次第である。

## 事例研究 移民問題 (一)

—アイルランド人の場合—

### 一、

これを扱った研究家しかも東部ロンドンのアイルランド移民とその社会学的問題を扱った研究はそう多くはない。その間でも、最も理解し容いのは、J・ジャクソンの『アイルランド人』(Jackson, John A, The Irish)である。そこでこの章では総括的な紹介は止めてある特定の民族の問題、(問題といつてもここでは特に移民の問題を取り扱うことになるが)、それをケース研究として、彼の論文から若干のまとめをしておきたいと思う。

彼の主張の出発点は、まず首都とかシテイ(都市)にはそこから物理的に遠い国の人々を強力にさそい込むサムシング(素引力)をもっているということである。事実都市部に人々が集中することは確かである。態学の課題としても実に興味ある事柄がある。つまり何故に都市に向

つて人々が集めるのかであらうか、その解答として魅力があると言うのも一応はうなずける。この人口移動については又別に述べることにして。英国でもこの大都市シテイを目ざして人々が移動(Social solidarity)してきたことは例外ではない。例えば隣国のスコットランドはもち論、アイルランドから移ってきている。ドクター・ジョンソンの言をもつてすれば「ロンドンに至るハイロードはスコットランドの人々の最大の魅力であつた」と、つまりハイランドからみたロンドンの景色景観のすばらしさを表現したものだらうと思うが。要するに遠く程あこがれる(美化)心理ではなからうか。

しかも一口に移住といつても後ろ髪を引かれる思と同時に新地に対するさまざまな心配で不安なども伴なう。さし当り水の違ふところを経験するであらう文化||生活様式のちがいはとまどいをもかくせなかつたらう。言つてみれば田舎ものなのである。従つてあれこれなやみながらも困難を覚悟のうえ郷を後にするのであつてみれば、右旋んか左旋んか、この結果農村での生活に一応の終止符をうつて新しい都市におもむくというのであれば、何ほどかこれに強く引きつけられる魅力、アトラクションがなければならぬ。とするならば当時の記録の中に「ロンドンの街は全て金で舗装されている」という羨ましい程の噂(流言飛語)に誘われて移動してきたこともあながちうそではあるまい。誰にでもそんな金の町や道あればそこに移り住みたいという素材な気持ちに変わりあるまい。

まさに米国の開拓史に残るゴールドラッシュを思わせるものがある

う。少なからず移民団の中には一獲千金を夢みた者たちも決して少なくはなかった。当時のスコットランドやアイルランドの人々が貧しかったことは事実否めないことである。とくになまけ者の悪評レッテルさえつけられていた。彼らがこの金鉱に群れ集まるようにして「金の町」ロンドンに集中してきたと言つて良い。

そもそもアイルランドにそうした人口の移動がはじまるのは十二世紀のはじめである。隣り合わせであつたという条件がそうして人々のゆききを容易にしたのだろうか……大都市にアイルランド人のコロニーを作つて移り住んだ記録が残っている。しかも彼らの多くはまずアイルランド商人たちでとくにリバープール、ブリストル、ロンドンといった都市に集中してきた。この記録によると、すでにそれらの大都市にはアイルランドのセツルメント（入植者）が千四百人余り出来ていたという。

十四世紀にはアイルランドの浪人が国外にさること（逃亡）が法律で許されるようになり、この期間を境いに人口流出が増大していったことはあきらかである。また十八世紀に入ると季節労働者として国外に出て働くいわゆる“Summer Visitor”が出現、これは主に農業の機械化によるもので、これまでの人手を要してきた労作は機械にとつて変わり、多くの農業従事者を失業に追い込んでしまった。機よく英国の各地とくに農業ランドでは逆に人手を要することになり、茲にアイルランド各地から人々が季節労働者として迎えることになった。ところがその大半の者は収獲後も茲にとどまつて適当な仕事をみつ

けつづけた。

以上述べたような人口流入のパターンが十九世紀にはアイルランドから英国に人々を移動させたかたちである。しかも、これはこの世紀を通じてずーと引き続いてきたのもこの特徴の一つである。

これとは別に特筆すべきことは一八四七年と翌四十八年の二ケ年に農作物の不作とききんによる移民団 (famine immigrants) を派出させた。この間イングランド各地のシテイに流れ込んできたものの数はこれまで流出した数を大巾に越えていたと記録されている。

さらに十八世紀末にかけてこの国の人口が増え始め、アイルランド人口がこの国の経済に圧迫をかけはじめた。その上度重なる凶作、それに伴つて派生した困乱が一層それに拍車をかける結果となつた。従つてこの人口流出にはどめをする策など皆無だつたと言える。

一七九八年 “Rebellion the Act of Union” が通過したときだが、J・ガーウッドは次のような報告をしている。事実大都市に向つての移動したアイルランドの労働者たちの賃金に格段の差があつたことを指摘している。そこでローマン・カソリック教会と共同して、ロンドンにアイルランド人の事務所（出生機関）をオープンさせた。これはロンドンへの移住の便宜をはかると共に、彼らはこの事務所を通じてロンドンの各地に Silver street, Golden Square Golden Lane, Barbican といった地名のあることを知つたのだ。そこに殺到したのも、彼らはそこで何らかの施こしや金にありつけると堅く信じていたものと察する。アイルランドからの正確な人に流出のデータをつかむ

にはセンサスがある。

一八四一年のセンサス、これは英国でも初めての出生地別の人口調査を試行した年だ。この結果（移民の子を英国人として登録された）によると、英国にアイルランド生れの人々が二八万九千八人口の一パーセント、ウエルズでは十二万六千八人余が登録された。ところで大都市ロンドンへの人口調査の結果では、ロンドン人口市民の凡そ二〇パーセントがアイルランドからの移住民だったことが分かる。

同時にこの人口調査で興味あることは、ある特定の場所（地域）に人口の過密化のあることが判明した。その他地方にも除々にアイルランドから移民がうつり住んでいることが確認された。十七世紀の初期にはセント・ギレス・イン・ザ・フィールド（St. Giles in the Fields）の教区内にはアイルランドからの移民が群がり住んでいることも分っていた。それが十八世紀になるとさらにサトロンヒル（Satron Hill）シヨルデイチ（Shorevitch）ブルムズベリー（Bloomsbury）ワッピング（Wapping）ホワイットチャペル（Whitechapel）ポプラ（Poplar）などに拡がり、さらに十九世紀にはそこを中心にした大きなスラム街をつくりここに彼らの多くを移民を吸叫してしまっていた。

一八一五年までには主都ロンドンでのアイルランド人の貧民の数が一万四千八人余と推計されていたが、その半部以上が子供であったことが分った。したがって彼らにその救済金が用意された。一七九六年には先きに示したセント・ギレス（St. Giles）セント・シモーシ（St. George）それにブルームズベリー（Bloomsbury）合せて二千八百

余が、さらには一八一四年にセイント・ギルズのみで二万ポンドを要したという記録をのこしている。いずれにせよ教区にとってアイルランドの貧困者の移民は大きな負担となっていた。

例えば、一八一六年に出版された。報告書（Report on the Education the Lower Order in the Metropolis. IV. George, MD. London Life in the 18th Century, London, 1925）の六頁と二三頁などを参照にするとその負担がいかに重かったかを伺い知ることができる。

その後も、その移民は止めことなく、むしろ拡大の傾向さえ示していた。ついに一八二〇年代それに次の三〇年代までには大部分ロンドンをもとより、他の周辺都市においてもこの影響が出はじめてきた。ついにこのアイルランドからの移民を放置しておけなくなり英国への移入者としてこの問題が社会問題化するに至った。まず立ち上がったのは文壇の名士たちの間で論じられるようになった。例えば代表的な人物はトーマス・カーラール（Thomas Carlyle）らである。彼は一八九二年に『チャチズム』（Chrtism）なる一書をしたためたがその十九頁にアイルランドの流浪の民のあわれさについて同情を隠し切れなかった。

「このあわれなケルト語しやべるアイルランドの兄弟たちよ、彼らは一体何ができるといふのだらうか？彼らの多くは憩う家もなく、ただここに我々にあくたいをつくつためにやってきたのか、彼らは悲しもつてまわり道をした連中なのだ……」と。

そのうちアイルランド人についていろいろな話題がいきかよった。容易ならぬことをまきおこすのではという恐れさえいだきはじめた。その一つは、英国人の生活の水準を著しく低下させるのではなからうとか、労働市場を荒らしまくるのでは、つまり安い賃金で働きまた *blackleg labour* として働くことを恐れたのだ。そのため一七二六年の初期にはある処置として「賃金のカット」が以来百年間に亘って実施されるに至ったということである。

このアイルランドのききん、凶作は、英国の港にアイルランドの避難民を集めることになった。とくにリバープールや多くの港町には彼らはいえど寒さのためこえた人々や病人でひしめき合った。とくに北ウエルズにはアイルランドの移民団がたどりついたことが A・レドフ・ヨーク (Redford, A, *Labour Migration in England, 1800-1850. Manchester 1936 pl36*) の書の中に記されている。それによるとこの極貧のアイルランドからの移民の多くは度重なる凶作のためハラをすかした連中ばかりでその上、ペストのような病気を背負った連中が何千何百と町に群がっていたことを記録している。

その他、彼らの群がるどころ全てがコレラ・汚物、渦密、悪徳の代名詞となり、これが隣り合わせの近隣からパブリック・コンプレン(苦情)となってふつとうてきた。ピークは一八五一年にロンドンのアイルランド生れの住人が十萬八千人余、と人口の五パーセント(四・六%)に達したのを頂点に年次減少の傾向を示し、一九〇一年には一・三%(六万人) 同年スコットランドは七パーセントしかもそ

の四分の一がリバープールに集中していたことが分かる。さらに一八六一年には英国やウエルズに、一八八一年にはスコットランドで各々そのピークを示した。但しスコットランドにおける人口比はロンドンの比どころか一八五一年にピークの七パーセントを実に驚異的な数値を示した。これによる限りそうたいして減少率を低下してはいないことになる。例えばロンドンに一・三パーセントという最低の記録をしたときでも、スコットランドでは四・六パーセント二〇万人とロンドンの凡て四倍近くの人口がひしめいていたことになる。ただその後、ロンドンでも一九〇一年から三〇年間一・四パーセント六万人と横ばえがつづくが一九五一年になると三・三パーセントと十一万人一千人もアイルランド人をかかえることになる。この増加は二〇年間に凡そ倍の人口増となっていることを示したものだ。

## 二、

第二世界大戦中アイルランドからの移民が決して制限されたわけではない。むしろ引き続き新しい形態の都市への流入となって現れられてきた。この間、アイルランドは *Irish Free State* (後に *Irish Republic* となるが) を設立する。これも英国の好意ある移民政策として大きな役割を果たすことになるが、さらに年代がのぼり、一九六二年、これは *The Commonwealth Immigrants Act* の設立した年であるがこの時代より少しづつ様相を変えはじめてきていることが分かる。即ちこの法律からはじめてアイルランドからの移民を制限するのための制度化が行なわれたことだ。



さて、移民の問題を首都ロンドンに移してそのドキュメントを考察してみよう。その第一にとり上げておかねばならないことは、先きにもふれた様に、ききん時のそれである。当時の模様について知る手ががかりがいくつかあるが、今三つ程あげておく。その一つは当時の衛生報告書だ、しかもこれは相当量記録にとどまっておき、またその信憑性から言ってもはじめに挙げておいていいものと思う。第二の資料はその他多くのコミッションの記録である。さらに最後のこれはその後調査された研究資料に基くものである。

総じてこの時期の移民つまり、ききんによるそれは一見して誰れの目にも分かるような見分け（“Visibe”：migrants）ができた、例えば、彼らの着用している着物から、宗教や、それにことば使い（アイルランド語しかしやべらないこと）などから容易に判別ができたというものだ。

メイヒュ(Mayhew)の筆によると、実によく町の様子、どんな仕事についているか、さらには人々の生活なども詳細にそのピクチャ入りで記録されている。とくに力を入れて記録したものはおそらくロンドンの彼らの生活の悲惨さを画いたものであらう。それから三〇年後C・ブーツであるが彼はことわるまでもなく、ロンドンの労働者生活を詳細かつ系統的組織的に社会調査を試行した人物でありかれによると、アイルランドの伝統的な仕事はなんといっても力仕事のできる港の労働者たちだと記している。とくに注目したのは単独では決して人目をひくような行動をしないということだ。例えばその良い例が一八

八〇年と一九一四年のドック労働者による大ストライクが行われた時期でとくにロンドンの貧民階級が注目に価する事件をおこした。そのときでさえアイルランドの労働者たちはなんらそれらに関心を示さなかったということである。

ところがいやが上にも我々の関心をたきつけるものは今世紀に入っからのアイルランドの移民団のそれである。以来これは英国人がいつもおびえてきたこと柄となった。

ただ、今迄と異なる点は“visible immigrants”とし容易に区別がつかぬようになったことであらう。即ち先に示したように、一見してそれと判かる服飾、ことばづかい、宗教(カトリック教徒)などに若干の変化がおこりはじめてきたことだらう。つまりアイルランド人が英語を話すようになり、また宗教(英国々教会)も自由に受け入れるようになってきたことであらう。また事実その移住者数も減少してきたこととも大いに関係があるかとおもうが、すなわちこの時期はアイルランドからの移民とその他の国外からの新しい移民との関係が、その数の上で逆転し前者が著しく減少したのに対して、後者のそれがむしろ増加をするといった現象があらわれてきたことによる。

もっとも、その主な外国人の移民(alien)はユダヤ人の移動・流入である。ところがこの新しいユダヤ人の流入については、当時つまり十九世紀の末の大英帝国のインペリアリストにとって、とくにアイルランドの貧しい移民団よりは注目の度合やいや関心の度合がうすかったと言えよう。

英国への経済的吸叫について述べるならばゼネラル・アン・エンプロイメントの時でさえ実際仕事についているそれらの移民労働者はとくに地方出、それに多少とも農村部からのそれで農業従事者ということからして英国人労働者を差程圧迫するほどのものではなかった。その理由は今述べたように彼らの大半が百姓という未熟練労働かきもなくば多少の熟練を必要とした仕事に彼らが従事していたからであらう。例えばその最も良い例は十九世紀の職種をみれば判ることだが、土木（土方）関係の仕事、道路工事、鉄道工事、それにドック工事など人夫凡そ力仕事を必要とするもので占められていた。しかもこうした伝統は二〇世紀まで、つまり第二次世界大戦まで続いてきたことは事実だ。女性労働者についても重労働を必要とする家政婦の仕事に従事していた者が圧倒に多いことから容易に分けるとおもう。

次に第二次世界大戦の後ではそれがどう変わったのか捕足しておかねばならない。男子労働者の場合は力仕事には変わりはないが、従事した仕事の業種が変わった。主に建築業あるいは化学工業の発達によりその方面での仕事、既に仕事といっても力仕事を要するもの、あるにまた有害な職場での労働に彼らが用いられた。

戦時中とくに南アイルランドの移民をコントロールしてきた。その理由は“neutral power”を残すためのもので、すでに労働者内に“selective recruitment”が採用され、それを組織づけられた。この政策により十万人のアイルランド人が英国に労働者として流入している。各種の仕事に従事し十分な役割を担った。この新しく仕事に

ついた職種はこれまでのアイルランドの移民が経験したことの無い高度な軍需産業の一翼を担ったもので、とくにこのスキル（技術）を要する仕事に配属されたことだろう。こうして終いに今迄の「未熟練労働者」としての汚名が取り去られることになったのである。

当時、多少のトラブル、IRAなどの活動が目立って横行するようになったこと、またサボターージュなどの抵抗を示すなどがあつたが、総じて他の多くのアイルランド人たちは、この非常時（大戦）に一翼を担ってくれたことは間違いない。

とくにこの時期が移民の重要もペリオドとなるのは“direct labour recruitment”が実施された時になる。しかもこれはアイルランドの国内にも新しい産業がおこり、拡大した事と無縁ではない。こうして戦時中の役割はその後の受け入れを修正せざるをえなかった、また終戦と同時にいやが上にもこのアイルランドの労働者が手に技術を身につけたため労働市場のポテンシャルを高揚させたことに間違いはないこととおもう。

そうした変化を“Occupational absorption”というがそうした現象があらわれてきたことこれらは同時に二つの結果をもたらしたが、一つは戦時中のリクルートメントの結果としてあらわれ、さらにもうひとつは、アイルランドの社会的構造の変化、具体的には職業上の変化であるがこれらの結果として“Occupational adaption”がでてきたと解釈して良い、事業上このアイルランドの労働者が英国やウェルズに与えた影響は大きい、少くともその職業上の構造においてである

がそれが言える。少くともこの時代の移民が未熟練工と準熟練工(技能労働者)ともに人的資源として両方をもった移民として流出してきた。しかもこれらの労働者は英国に流入後、特別な技術を身につけるため訓練をうけ、さらにはより以上の技能労働者となるためのプロフェシヨナルな高度の専門性職能をうけることになった。

この変化が一九五一年の人口調査<sup>センサス</sup>に表われてきている。つまり従来の伝統を破り、新しいステイタスに到達したことを物語っている。またさらに巾の広い領域を開発していったことなどが判かる。

たとえば、建築業に現れるアイルランド生れの男子の割合が十八パーセント凡そ五人の一人の割合でいたことを示している。また金属工業へのそれは十三パーセント、交通(運送)関係への従事者九パーセントと凡そ十人に一人の割合、さらにはとくに特種な仕事でないしかも熟練を要しない仕事に従事している者の割合が十四パーセントとなってきた。これに対して女子の場合は、三十九パーセントつまり三人に一人がパーソナル・サービスの業務についていることが特徴としてあげられる。さらに数量的に多いのは専門性を必要とする仕事で例えば看護婦とかがそれだが、この占める割合は二十二パーセント、更にその他、医師、十二パーセント、ローマンカトリックの僧侶教師となったもの二十六パーセントと、これらが示すようにかなり専門職に侵透していったことが伺える。

とは言え英国人労働者の仲間から決して苦情がなかった訳けではない。例えば傭主からこんな苦情もある。(一)点々と職をかえるとか(二)

仕事かのろずぎるとか、はたまた(三)企業主への忠誠心をかくことなど、それに四一つの仕事に長つづきせず、突然その他の職場に変わって行ってしまうことなどの苦情である。

にもかかわらず、そうした手に仕事をもちある特種の技能を有する有能な労働者や専門家が増加していったことは論をまつまでもない。しかも彼らは都市の生活に早くなれ国内の未熟練労働者よりも就労の保障や国定化、永久的就職が容易になったとみる面もある。例えば、医師や法律家、その他の実務家がロンドン周辺にあらわれ定着してきたこと。その上アイルランドの国内で養成されたエンジニアがそれにつづいて流入、とくに目立って著しい職種は多くの学校の教師らで彼らをロンドンのホワイト・カラーと呼ばれる程中産階級の特徴をもちはじめたことだ。彼らが定着し、アイルランドのセツルメントを形成するのは主として先きにみたように都市である。例えばくりかえしになるが十九世紀ではリバープールやグラスゴーそれにロンドンなどと続くが、とくにロンドンの場合は当時の産業ドック建設と多いに関連していたことを述べたが、当所はこれに関係なくセント・ジルズ、ホルボーン(ST. Giles, Holborn)の周辺に群がり集っていたのが、ドック開発に伴って徐々にテムズの川ぞいつまりテムズ河の東部に移り住むようになっていったといえる。

ところが今回ではこのエコロジも変わりやや西方にシフト(移動)した感じがする。むしろ東ロンドンに代って西ロンドンに彼らの移民団が集るようになってきたことだろう。例えばパーディグトン

(Paddington) ケンジントン (Kensington) それにハマー・スミス (Hammersmith) などと言った広範囲の地区に移り住んでおりこれは戦後ここへの移動とセトルメントがおったことで、今日の地位を築き上げたといつて良い。

例えばウェストミンスターの場合、全人口のかつて三・八パーセントがアイルランド生れの者で占められていたと記されているが、一九五年の調査時には、六・八パーセント実に三パーセンも増加している。ちなみに先きにみた西ロンドンの各地区を参考に述べれば Kensington, St. Pancras, Holborn, Hammersmith, Haverstead, Chelsea, St. Marylebone, Paddington の各地区では五パーセント以上を占めているといふことだ。しかもパデントンでは十二人に一人の割合でアイルランドが占めるようになったことをこれは物語っているのだ。

ところがこのアイルランド人の市内化とともにロンドンの郊外にもそれが若干及ぶようになった。例えば、ウィルズデン、チェルシー (Willesden, Chiswick) がそれで、この二地区まではそれらのセトルメントの拡散と了解しても良いほどだ、新産業の発展に伴ないゲレート、ウェスト・ロードスロー、セティネズ・ダーゲンハム・ルートン (Great West Road Slough, Staines, Dagenham, Luton) にまでその影響が波及し、これらの地域開発は彼らの新しいアタックの努力の結果と言つても過言ではない。

ちなみに英国ロンドンにかかえた人口は、ウェルズの第三番目にランクされる程でアイルランド生れが十二万二千六百三十八人と一九五

一年度のセンサスでは算出されている。

十九世紀、この世紀は例の凶作つづききがアイルランドを襲つたにもかかわらずアイルランドからの流れ者の移動が英国の都市に新しいスラム街をつくつて住みついた。しかもあふれんばかりの人々が集まり、しかも短期のハウジングの結果寄留するところからその土地への帰属感を喪失した一種のサブ・カルチャ (Sub culture) の形成がおこりはじめてきたことを特記せねばなるまい、彼らの特徴は集まりを定着せずその日暮し、その日その日をあちこち宿り歩くといった (ワンダリング) 性格をつくり出す。またそこにとどまつて落ちつくような移民としての適応性を著しく欠くような現象が出ている。しかもこの担い手は学生とかアイルランド生れのアイルランド一世に比較的多くみられること。とくにそうした sub-culture が大都市の周辺の Leaciyng areas (ふきだまり) に多発した。とくにそうした条件を満たしながらもさらに社会適応性を著しく喪失した人々につき、新しい社会問題や社会心理学的問題を派生する具体的には無保障 (insecurity) 逃避 (escapism) 情緒的人間関係の喪失 (lack of affectional relationship) 性の不一致 (sexual maladjustment) などである。

決してこうした問題がアイルランドのスラム街に限ったことではないが、例えばドクター・ソーディ (Dr. K. Soddy) の意見などを参考にするに「都市生活での諸々の要求に対して著しく適応に失敗したものの総括としての特色をもっている」とさえ指示している。これは (Chinical Child Psychiatry, London, 1960-p.25) さらに彼の意見の

中には注目すべきものがあるが、Sub-cultural areasに残っている者の中には、そうした問題を取りたてて問題 (acculturation difficulties) にしたり、またそれを悲しむということさえない、むしろアイルランドの農村の生活からロンドンのスラムへ anomic condition のもち込みという “back-sliding areas” を特徴としていることにある。この結果というのは強力なアイルランドの特質を喪失させたからであり、かつまた強力なアイルランドの価値観を喪ったことにある。同時に彼らにはコミニティという感情がないこと、さらにはアノミーの状態にあることなど、とくに子供の世代に大きな影響を与えこれによる不適応やいつ脱現象を呈することであり、今後のこうした地区の問題である。

総じて言えることは、そうした不適応を出す地区が人の密集地であったり、貧しい住宅地だったりすることである。とくに問題はそればかりか、人間の生活にとって保健、衛生上の問題も同時に呈してくる。つまりこの健康問題や犯罪とも関連してくる。とくに若い青年例えば十五才から二十五才までのそれに肺結核が多発し、また、多くの感染者を出した。これは接触の機会・度合が多くなったことに帰因するものだが、また犯罪のそれに至っては警察の記録にその多発が記録され残っている。そうした犯罪の原因はスラム地区の社会的環境によるものだが、このスラム街に居住するアイルランドはその影響をうけているものと思える。

“Robbery in London” (Meclintock, F. H. and Gibson, E.

Robbery in London, 61. pp 50-51) の分析は次のような結果を報告している。つまり一九五七年にはこの種の犯罪が二十パーセントがアイルランド生れの人々であるということだ彼らの多くは十七才から三十才までの独身者で、この大半が未熟な労働者という特質をもっている。これは単身で英国やウェルズに流れてきたからであろう。しかもが安宿に宿泊をし、先きに示した如く未熟労働者として働いていたものである。

ところで少しく彼らの移民に際しての社会学的特徴などを記述しておこう。

まず英国ウェルズでのアイルランド生れの人口は一九五一年の総計によると、移民の四九パーセントを呈めていること、しかもその二十九パーセント(三分の一)は二十才より四十才の単身者で、結婚した者、または後にアイルランド同志結婚したものなどほとんど無に近いという報告がある。

次にこれらの人々を結び合わせる親族(キン・シップ)のリンクについて述べるならば、まずそうしたキンがアイルランドからの移民に新しい関係をつくることに作用していること、しかもこの新しい流入者に対して親しい家族のような Solidarity と security の情を与えている、しかもその関係は、兄弟姉妹間のそのの (brother follows brother, Sistes follows sister) ように強くお互いに結びつき合っている、事実移民の多くはこうした関係を頼りにやっては来ている。とくに近距離よりも遠距離の人と人とを強力に結び合わせるためにはこ

のリンクが作用している。この他家族リンクも同様の作用をもって大きな移民の役割を果たしている。最後に若干差別意識観などの心理的なステレオタイプ感情についてもふれておきたい。

これは先きにも示した通り、アイルランド系のコミュニティができそこに何らかの結びつきができて全体として一つになる。あるいは演ずるといようなことはない。これは先きにストライキの時に示した態度とも関連してくるところだと思うのだが、団結とか一体になると言うことが困難な民族と受けとられそう。今日ではかつてのようにアイルランド人を一種の *Scapegoats* (犠牲の山羊) のようなせいさいは失くなったとは言えある範囲を超えた心理的あるいは社会的緊張が永く続いたりすると、差別意識がでてくる。これはすでに言い伝えられてきたもので「アイリッシュは何々だ」とステレオタイプして言うことさえある。いまその一つ二つ例を挙げれば、「大酒のみだ」ととか「信頼のおけぬ気を許されめ連中」その上、「粗野でゴロツキ野郎」などを挙げることができる。こうしたステレオタイプ化されたものをアイルランド人に向って言ったり口に出して言わないまでも偏りみたり、あるいは全ての人々をそういう目で見たりすることもある。

よくロンドンの地方紙などには見かける「[NoIrish, NoColoured]」などその典型的なものと言えるし、ロンドンに住んでいるアイルランド人には「Irishman make bad Englishman」など残っている事ながらも多少かい間みることができるところで、こうした民族偏見問題に対してリクリエトするための社会的なサービス活動がな

されているが、内でもローマン・カトリックの教会の果たしている役割は実に大だと言って良い、この教会は本国との連絡を密にとり、教会そのものがロンドンの生活者らの救済センターとなっていることであろう。ときに教会はこうした少数民族のここではカトリックの信徒ということになるが、彼らの保障するための施設として役割を担う者として多くのカトリックの僧侶たちが何らの適当な援助をおしまない。むしろ教会は強力にこの移民民を支持し保護してきた唯一の機関といつて良いであろう。